

学界展望

英米国際経済学の潮流

小島 清
(一橋大学)

はしがき

およそ一九五〇年から五四年末までの英米における国際経済理論の主要問題を展望し、それらを貫く潮流をつかみ出そうというのが本稿の目的である。

わたくしはたまたま一九五二年七月から五五年一月まで英、欧、米、加に留学する幸運を得た。現地で見、聞き、接して得た実感をもとし、他方わたくし自身の問題と興味とを中心にしてこの展望を行おうとするのである。従って、もとよりこの展望は国際経済学のすべての問題と理論とを網羅しているわけでないし、わたくしなりの見方になりに偏っていることは、予め許されたい。

一九五〇年から五四年にかけての期間は、大きな衝撃を与えたケインズ経済学が漸く鋭い批判と反省とに直面し、ケインズ経済学を超越し包摂した理論へと発展しようとしているかに見

える。それは一体リカードやミルの古典派経済学へ基本アイディアにおいて復帰することであろうか。それとも新しい長期的成長論的動態理論が生み出されるのであろうか。まだそのいずれともはっきりしない未知数である。だが少くともこういう反省と苦心との跡はこの期間の国際経済学の特色ないし潮流を形づくっているかにみえる。それは需要・所得分析から生産分析へ、部分均衡論から一般均衡論へ、静態論から発展理論的動態論へ、というような傾向であると要約していいであらう。この直前の期間にかなり支配的であったドル不足問題に対するやや短期的視点からする深刻なベシミズム（特に輸入需要弾力性ベシミズム）は後退したが、こんどはもっと長期的視点からする、ベシミズムとはいきれないにしてもかなり暗い、ドル不足問題の理論的歴史的研究につき進んでいることも考え合わされてよいであらう。そういう現実問題からする理論へのイムパクトは国際経済学の前進の基底であり最も顕著な特色でもある。

(一) 本稿以前の期間についての国際経済学の展望は、Lloyd A. Metzler, "The Theory of International Trade," *A Survey of Contemporary Economics*, ed. by Howard S. Ellis, Blackston, 1949. (邦訳は都留重人訳監修「現代経済学の展望・政策篇」岩波、一九五一年、におさめられている。)

Norman S. Buchanan, "International Finance," *A*

Survey of Contemporary Economics, Vol. II, ed. by B. F. Haley, Richard D. Irwin, 1952.

小島清「國際經濟理論の研究」東洋經濟新報社、一九五二年、第一篇、國際經濟學の展望、あわせて参照されたい。

一 古典派貿易理論は現代にも妥当するか

「近代的諸条件下にも古典派貿易理論は妥当する」といふ下に行つたハンブラーの報告が、一九五三年タリスマン後のアメリカ經濟学会ワシントン・ミーティングの一つの大意な山であつた。このよう問題が真剣に討議されかつこれからいふところきめられるべきことが、なほがきで述べたところな一九五〇年後の國際經濟學の中心的苦惱をよくあらわつてゐる。問題の発端はサマイナーの著 *International Economics*, 1951, pp. 15—16. にあつて次のような反省を示唆を与へてゐる。

As a final comment, the classical theory of international trade had shown a great deal of durability in the past in the face of hostile criticism. It has in recent years lost its dominance, and its surviving exponents have lost their assurance of its adequacy.……It seems that the old theory was sufficiently elastic, especially through its monetary phases, to absorb without friction all the Key-

nesian contributions, and that it is now on the verge of undergoing systematic rehabilitation. Despite my belief in its merits and its relevance during its period of dominance, I am convinced, however, that it would be a mistake to carry its rehabilitation so far as to claim for it, even in its improved and modernized form, adequacy as a theory to guide policy in the present-day world. The world has changed greatly, and is now a world of planned economies, of state trading, of substantially arbitrary and inflexible national price structures, and of managed instability in exchange rates. The classical theory is not directly relevant for such a world, and it may be that for such a world there is and can be no relevant *general* theory.

これに対してハンブラーはサマイナーともあつた古典派理論の信奉者がこのようにいふのは後退しすぎである、貿易理論の主要部門のいずれになつて「古典派のどな貿易理論は一つになつ」といふきつづる。すなわち第一に「國際收支均衡化メカニズムになつて。第二に「國際分業の非貨幣的均衡理論——比較生産費説とその現代的改裝、多数生産要素モデル、生産要素価格や所得分配の問題など——において。第三に「貿易のワイルド一面——自由貿易のルール、保護主義の理論づけ、最惠國稅論など——になつて。

はたして、ヴァイナーの極めて素直な反省と警告か、ハッラーの古典派理論への強い信奉と確信のいずれが正しいであろうか。あるいは、ヴァイナーは古典派理論の現代的状況への直接的適用性だけについて反省をうながしており、ハッラーは窮極理論としての妥当性や真理を繰返して述べているのであろうか。おそらく近く発表されるであろうヴァイナーの反批判が大きな興味をもって待たれる。

だがわたくしにはどうも、ヴァイナーも計画経済、国家貿易、非屈伸の価格などの十九世紀にくらべての制度的変化だけをあげるにとどまって古典派理論の静態理論たることから生ずる問題をついていないし、ハッラーのあげる貿易のこれまでの諸理論も静態理論の域をこえていないように見える。わたくしには古典派理論の現代的妥当性について論ぜられねばならぬ本当に重要な問題は、たとえばハッラーに続いて同じミートینگでハムフレイが報告したアメリカ南部の工業化が世界的国際收支調整困難の原因たりうるというような、古典派理論が静態理論であることの認識と、それに代る発展理論的動態論の究明でなければならぬように思われる。

Joan Robinson, "The Pure Theory of International Trade," and "Exchange Equilibrium," *Collected Economic Papers*, Oxford, 1951.

Jacob Viner, *International Trade and Economic Development*,

lectures delivered at the National University of Brazil, Oxford 1953.

Ditto, *International Economics*, the Free Press, 1951.

Gottfried Haberler, "The Relevance of the Classical Theory under Modern Conditions," *A. E. R.*, May 1954.

Don D. Humphrey, "Forces of Disequilibrium and World Disorder," *A. E. R.*, May 1954.

Thomas Balogh, "Welfare and Free Trade," *E. J.*, March 1951.

Thomas Balogh, "Welfare and Free Trade," *E. J.*, March 1951.

二 グレーアム理論の再評価と

リニア・プロダクション

新しい理論的展開への動きとして先ず第一に注目すべきは、グレーアムの「生産費説的貿易理論」の再評価であろう。グレーアムの着想は既に早く一九二三年に発表されたのであるが、三十年の長い間、需要説的或は厚生経済学的分析によって立つ貿易理論の主流の力に押し流されて、忘れ去られていたのである。だが彼の主著が一九四八年に刊行されるに及び新しく再評価、再吟味されるに至った。グレーアムが不幸な死を遂げ主著が遺稿たる意味を持つに至ったことも再評価をさかんにした理由の一つとなったであろうが、何と云っても、グレーアムがその一生をかけて悩みぬきしかも完成できなかった「生産費」或は生産側の適応によって国際価値と国際均衡がきまるとなす

需要説的主流理論に対するはげしい批判的態度は、いつまでも生きており、十分に伸ばされなければならぬアイディアだと思われる。

グレーアム理論の再評価は、ベチャール、メッツラー、エリオット、ホワイティンなどによって時を同じくしてなされた。かれらの評価は殆んど、グレーアム理論も古典派貿易理論と大きくちがうところなく、後者に包摂し得られ、結婚せしめうるものであると見ている。マーシャルの連続的なスムーズな相互需要供給曲線にはならないけれども、生産オフアー直線に需要オフアー曲線が次ぎつぎに断続的につづく階段式相互需要供給曲線に方式化しうるとなすエリオットとベチャールの解釈に興味がもたれる。

しかしグレーアム理論をミル、マーシャルの古典派理論と大差なしと片づけてしまうこれらの再評価に対し死せるグレーアムが果して満足したであろうかは、わたくしには甚だ疑問に思われる。たとえば階段式相互需要供給曲線という解釈にしても、その生産オフアー直線の傾斜と長さが一体ギブンであるのか可変であるのかで大きく問題は異ってこよう。再評価者たちは、不変生産費・生産転換前の生産量・完全特化という一連の古典派的前提を採る。そうであれば生産オフアー直線の傾斜と長さはギブンであり不変である。またそうであれば国際均衡を左右する変数は需要条件すなわち需要オフアー曲線のいかんだけとなる。そのように解することによってのみグレーアム理論を古

典派理論と結婚させうるのである。だがもしも、一つ一つの生産オフアー直線の長さは企業者余剰或は利潤の極大を追求する行動によってギブンなのではなく変化するものであると見るならば問題は著しく複雑になってこよう。つまり古典派や再評価者たちの体系においては、効用の極大という一つの極大原理しか含まれていない。わたくしのいう体系では、効用と利潤との二重極大原理が包摂されねばならない。わたくしにはグレーアムの努力の目標がこのような二重極大原理を包摂する体系の樹立にあるように思われる。幸にして通増費用、すなわち原点到なる代替曲線の場合には、限界費用価格づけ原理(marginal cost pricing principle)が利潤極大を満足させるので、二重極大原理を包摂する体系に到達していた。問題は不変費用すなわちリニアな生産函数の下での利潤極大原理は何であるかが究明されなければならない。

ホワイティンの結論は他の再評価者のそれと同じであるが、グレーアムの難解な数字例による解明を、リニア・プログラミングの方式にまとめあげたことにおいて注目すべき貢献を果している。同じ貢献は同じ時にマンケンジーによってもなされた。リニア・プログラミング或はアクティヴィティ・アナリシスの貿易理論への適用は、地域間貿易の分析、或は運送費其他を考慮に入れた最適立地点の選定などについて今後大いに発展させらるべき沃野であろう。

わたくしはホワイティンのグレーアム解釈には多くの不満と

疑問をもっている。だが根本的疑問は、リニア・プログラミングのねらうところは、数ヶ国より成る世界をはじめから一体とみて、世界生産の極大を求めることにある。それ自体は有意義な課題であらうし、マッケンジーはこの課題に限定しているのですっきりしている。だが各国の立場からみると、国際収支を均衡させつつ、各国の貿易利益を自由貿易的行動を前提として極大ならしめることにある。各国の貿易利益は利潤と効用との二重極大原理の完遂によって果される。そうなる問題はいたたびホイティンとは根本的に違った立て方となり解答も異なってくる。リニア・プログラミングを各国の利潤極大原理を離くように使いたいというのがわたたくし自身の問題である。ホイティンの三国二財貿易の解答において、そのうちの一国が全然貿易利益が得られないのに、世界全体の需要と供給を均衡させるために、生産転換と貿易をしなければならぬという一事は、不合理であり承認し難いように思ふ。

(a) ショーンマンの主張・論文

Frank D. Graham, *The Theory of International Values*, Princeton University Press, 1948.

Ditto, "The Theory of International Values Re-examined," *Quarterly Journal of Economics*, 1923, reprinted in *Readings in the Theory of International Trade*, selected by a committee of the American Economic Association,

The Blakiston, 1949.

Ditto, "The Theory of International Values," *Quarterly Journal of Economics*, 1931—32.

(c) ショーンマン理論の紹介・批評

Jacob Viner, *Studies in the Theory of International Trade*, Harper & Brothers, 1937, pp. 548—555.

G. A. Elliott, "The Theory of International Values," *Journal of Political Economy*, Feb. 1950.

Lloyd A. Metzler, "Graham's Theory of International Values," *American Economic Review*, June 1950.

G. S. Becker, "A Note on Multi-Country Trade," *American Economic Review*, Sept. 1952.

T. M. Whiting, "Classical Theory, Graham's Theory, and Linear Programming in International Trade," *Q. J. E.*, Nov. 1953.

Lionel McKenzie, "On Equilibrium in Graham's Model of World Trade and Other Competitive Systems," *Econometrica*, April 1954.

Ditto, "Specialization and Efficiency in World Production," *Review of Economic Studies*, 1953—54, Vol. XXI (3), No. 56.

(c) ショーンマン・ホートン・メツラーの論文

S. Reiter, "Trade Barriers in Activity Analysis," *R. Ec.*

Studies, 1952—53, Vol. XX (3), No. 53.

Vassily Leontief and others, *Studies in the Structure of the American Economy*, Oxford Univ. Press, 1953, Part II, The Extension of Input-Output Techniques to International Analysis. W. Leontief, "International Theory," and Walter Isard, "Some Empirical Results and Problems of Regional Input-Output Analysis."

Oskar Morgenstern and others, *Economic Activity Analysis*, John Wiley, 1954; C. P. Modlin and Rosenbluth, "The Treatment of Foreign and Domestic Trade and Transportation Charges in the Leontief Input-output Table."

Walter Isard and Merton J. Peck, "Location Theory and International and Interregional Trade Theory," *Q. J. E.*, Feb. 1954.

Walter Isard, "Location Theory and Trade Theory: A Short-run Analysis," *Q. J. E.*, May 1954.

P. A. Samuelson, "Spatial Price Equilibrium and Linear Programming," *A. E. R.*, June 1952.

(1) これについては不十分であるが、小島清「貿易利益の再吟味」一橋論叢一九五四年八月に展開した。その修正ならびに一層の展開に近い機会に発表したい。

三 貿易理論の一般均衡論化と幾何的解明

J・S・ミルの貿易均衡論または国際価値論の解明はマーシャル、エッジワースによって著しく前進せしめられたとはいへ、国内均衡をも含んだ貿易の一般均衡論的展開は必ずしも明瞭かつ十分だとはいえない。インテマによるマーシャル貿易論のすぐれた数学的再構成があるが、これも部分均衡論たる欠陥をまぬかれない。こういう欠陥をあらためて、貿易論を一般均衡論化することが、一九三〇年以後のきわだった傾向の一つであるとみていいであろう。その先駆者はオリインであり、ヒックスの「価値と資本」を範としてのされたモザックの労作を最大の収穫とみていいであろう。またサムエルソンの貢献も偉大なものがある。

マクループやメッツラーによる展開を一つの頂点とする外国貿易乗数の分析が、ハアバージャーやロウルセンとメッツラーによって、所得効果と価格効果を包摂した分析に前進せしめられたのも、貿易論の一般均衡論化への方向とみていいであろう。

他方貿易均衡化プロセスと均衡との幾何的解明が著しく前進せしめられた。それも効用無差別曲線と初期手持量だけを前提とするエッジワース契約曲線による解明を数歩ぬきで、生産転換と効用変化との双方を包摂した一般均衡論的解明に向っている。その先駆者となったレオンチエフの貢献を逸することができないが、彼とともに先駆者の一人たるラーナーの諸論文が一書にまとめられたことは利用者を大いに益するものがある。

幾何的解明はその取扱いに便利な通増費用ケースだけに限られるのではなく、不変費用や通減費用のケースについても拡張されてきた。マシユーズ、コーエンなどの展開がある。通減費用の原点に凸なる代替曲線の場合には、限界費用価格づけ原理に立つ限り、貿易が双方国に損失をもたらすことが明示された。これはそういう代替曲線への接線が極大ではなくして極小を与えることからみて当然である。これに対してわたくしは、不変費用についてわたくし自身が展開したのとほぼ同じ利潤極大原理を、通減費用ケースについて適用するならば、そして効用極大原理と併せて二重極大原理を持つならば、やはり貿易が双方国に利益をもたらすとの結論が得られると思う。こういう点についてきわめて示唆的なヒックスの論文を忘れることができない。

幾何的解明はミードによって集大成された。彼自身の最も大きな貢献はおそらく、生産側の変動と需要側の変動との両者を含む「貿易無差別曲線」をはっきりと導いたことであろう。彼の導いた「貿易無差別曲線」は彼が行ったのよりもはるかに簡単に画きうるようにわたくしには思われる。通増費用の生産代替曲線を円であるとみ、その中心を D としよう。効用無差別曲線群を同心円で表し、その中心(或は bliss-point)を O としよう。効用無差別曲線のうちの一つは生産代替曲線と外接する。外接点を K とすれば、これが貿易前の均衡点でありその点での接線が貿易前の価格線である。また K 点は D と O とをつないだ

直線(経済成長経路と呼ぼう)の上にある。さて通常のマシユールのオフファー曲線図を頭において頂いて、原点を通して貿易前の価格線を引き、それに直角な直線を引き DC に等しい長さを原点 O からはかってマークしよう。このマークした点を中心にして同心円を画くならばそれが求める貿易無差別曲線群である。貿易無差別曲線と原点を通る価格線との接点の軌跡として相互需要供給(オフファー)曲線が画きうることはいうまでもない。

(a) 貿易論の一般均衡論化

- Alfred Marshall, *The Pure Theory of Foreign Trade*, 1879;
 Ditto, *Money, Credit and Commerce*, 1929, Appendix J.
 F. Y. Edgeworth, "The Theory of International Trade,"
Economic Journal, 1894, reprinted in *Papers Relating to Political Economy*, Vol. II, 1925.
 Theodore O. Yntema, *A Mathematical Reformulation of the General Theory of International Trade*, Univ. of Chicago Press, 1932.
 Bertil Ohlin, *Interregional and International Trade*, 1933, 1952, especially Appendix I.
 Jacob L. Mosak, *General-Equilibrium Theory in International Trade*, Bloomington, 1944.
 P. A. Samuelson, "Welfare Economics and International

- Trade," *American Economic Review*, 1938.
- Ditto, "The Gains from International Trade," *Canadian Journal of Economics and Political Science*, 1939, reprinted in *Readings*. Ditto, *Foundations of Economic Analysis*, Cambridge, Mass., 1948, especially Chap. VIII.
- (ㄷ) 谷田岡崎謙藏・監訳松本孝一 國際貿易論
Fritz Machlup, *International Trade and the National Income Multiplier*, Philadelphia, 1943.
- Lloyd A. Metzler, "Underemployment Equilibrium in International Trade," *Econometrica*, April 1942.
- Ditto, "The Transfer Problem Reconsidered," *J. P. E.*, 1942, reprinted in *Readings*.
- Harry G. Johnson, "Diagrammatic Analysis of Income Variations and the Balance of Payments," *Q. J. E.*, Nov. 1950.
- Arnold C. Harberger, "Currency Depreciation, Income, and the Balance of Trade," *J. P. E.*, Feb. 1950.
- Svend Laursen and Lloyd A. Metzler, "Flexible Exchange Rates and the Theory of Employment," *Review of Economics and Statistics*, Nov. 1950.
- J. S. Chipman, *The Theory of Inter-Sectoral Money Flows and Income Formation*, Baltimore 1951.
- G. Stuvell, *The Exchange Stability Problem*, Oxford, 1951.
- John Burr Williams, *International Trade under Flexible Exchange Rates*, North-Holland pub. Co., Amsterdam, 1954.
- J. E. Meade, *The Balance of Payments, the Theory of International Economic Policy*, Vol. I, Oxford, 1951.
- Ditto, *The Balance of Payments, Mathematical Supplement*, Oxford, 1951.
- H. von Stackelberg, "The Theory of Foreign Exchange under Perfect Competition," *International Economic Papers*, No. 1, 1951.
- (ㄷ) 岡田謙藏・監訳松本孝一
Wasily W. Leontief, "The Use of Indifference Curves in the Analysis of Foreign Trade," *Q. J. E.*, 1933, reprinted in *Readings*.
- Abba P. Lerner, *Essays in Economic Analysis*, Macmillan, 1953, Part II.
- R. E. Baldwin, "Equilibrium in International Trade: A Diagrammatic Analysis," *Q. J. E.*, Nov. 1948.
- R. C. O. Matthews, "Reciprocal Demand and Increasing Returns," *Review of Economic Studies*, 1949—50.
- E. Coen, "Decreasing Costs and Gain from Trade," *Economica*, Aug. 1951.
- J. E. Meade, *A Geometry of International Trade*, George Allen & Unwin, 1952.

J. R. Hicks, "The Foundation of Welfare Economics," *Economic Journal*, Dec. 1939.

Cottfried Haberer, "Some Problems in the Pure Theory of International Trade," *E. J.*, June 1950.

William J. Baumol, *Welfare Economics and the Theory of the State*, Harvard Univ. Press, 1952, Part I.

I. M. D. Little, *A Critique of Welfare Economics*, Oxford, 1950.

Charles F. Haywood and Theodore K. Ruprecht, "A Note on the Use of the Box Diagram in International Trade Theory," *A. E. R.*, June 1954.

V. Maroni, "The Theory of Rational Economic Behavior of a Country in International Trade," *A. E. R.*, June 1952.

R. W. Stevens, "New Ideas in International Trade Theory," *A. E. R.*, June 1951.

四、トランスファー理論

いわゆる「古典理論」と「近代理論」とに分類されている、長い理論史をもつトランスファー問題について、サムエルソンが決定版ともいへる論文を発表した。彼の結論はこうである。

(1)賠償などの一方的支払は貿易均衡点をエッジワース契約曲

線に沿って動かさせる。交易条件が支払国に有利化するか不利化するか或は不変であるかは、新均衡点における両国の無差別曲線への共通接線のスロープがどうなるかによる。

(2)従って、トランスファーにつれて交易条件が支払国に不利化するという「古典理論」の見解を支持できるなんらのはっきりした根拠はない。

(3)だが運送費の如き impediments の存在を国際均衡モデルの中に明示的に挿入すると、トランスファーにつれて交易条件が必ず支払国に不利化するという「古典理論」的結論に到達する。

わたくしはサムエルソンの結論のうち(3)については異論をもたない。だが(1)、(2)の結論を導いた、エッジワース契約曲線、いいかえれば効用無差別曲線だけを道具に用いる分析方法について疑問をもつ。若し不変費用のケースにしろ、増増費用のケースにしろ、賠償に相当するだけの資源が他の生産部門から割かれなければならぬという事実、そういう生産転換に伴う生産能率の低下をはっきりと理論分析の中にとり入れるならば、交易条件が支払国に必ず不利化するという結論が得られる。これはかつてケインズがドイツ賠償金支払問題について樹立した見解である。わたくしはそれを支持する。サムエルソンは運送費などの Impediments の影響だけを考慮した。だがそれは当然に、或はもっと根本的に、賠償用資源の捻出の影響という問題に拡張するべきであり、いずれの影響も重なりあって交易条件

を其國に不利せしむる爲めに課税し得べきなり。

Paul A. Samuelson, "The Transfer Problem and Transport Costs: the Terms of Trade when Impediments are Absent," *Economic Journal*, June 1952.

Ditto, "The Transfer Problem and Transport Costs, II: Analysis of Effects of Impediments," *E. J.*, June 1954.

J. M. Keynes, "The German Transfer Problem," *E. J.*, 1952, reprinted in *Readings*.

Bertil Ohlin, "Transfer Difficulties, Real and Imagined," *E. J.*, 1929, reprinted in *Readings*.

A. C. Pigou, "The Effects of Reparations on the Ratio of International Exchange," *E. J.*, reprinted in *A Study in Public Finance*, 3rd ed., 1947, Chap. XIX.

Jacob Viner, *Studies in the Theory of International Trade*, 1937, pp. 325—60.

A. C. Pigou, "Unrequited Payments," *E. J.*, June 1950.
D. H. Robertson, "The Transfer Problem," in A. C. Pigou and D. H. Robertson, *Economic Essays and Addresses*, 1931.

G. A. Elliott, "Transfer of Means-of-Payment and the Terms of Trade," *Canadian J. of Economics and Pol. Science*, 1936.

M. Bronfenbrenner, "International Transfer and the Terms of Trade: An Extension of Pigou's Analysis," *Studies in Mathematical Economics and Econometrics in Memory of Henry Schultz*, 1942, ed. by O. Lange et al.

Jacob L. Mosak, *General-Equilibrium Theory in International Trade*, 1944, pp. 75—86.

五、最適関税の理論

関税が一体外国人によってまただけ外国人によって負担せられるかの問題はやはり一・の・の・以来、長い理論史を辿つてゐる。それがカルダーの *Economica*, 1940 の論文をあげてついで再び今味せられるに至り、その論議が主として *Review of Economic Studies* 誌上をにぎわつてゐる。そのなかでグラーフの一論が最もすぐれた決定版と見られてゐる。

相手国のオフナー曲線が与えられており、しかも相手国が報復的に関税をかけるというようなことをしなうとすれば、一国は関税をその輸入品にかけることによつて、貿易均衡を相手国のオフナー曲線に沿つて動かして、交易条件を自国に有利に転ずることが出来る。そういう均衡は自由貿易による均衡よりも高いサドルポイントを課税国にもたらす。さらに最適の関税は、課税国の無差別曲線が相手国のオフナー曲線と外接するところの均衡を動かすときに与えられるのである。

こゝから最適関税論についての疑問は、トランスファー理論

についてと同様に、それらの分析が生産側の条件乃至変動を明示することなく、無差別曲線とオファー曲線とだけを基礎に示てなされていることである。生産側の条件を明示的に挿入することによってわたくしはかなり異った結論を得ている。

第一に不変生産費ケースにおいては、輸入品への関税賦課は、課税が今までの輸入品を輸出品に変ずる程に高いのでなご限り、不変生産費の仮定より、なら輸入品の国内生産を刺戟するものでない。従って課税は消費者にとって輸入品価格を高めるといふ効果だけを持つ。しかも相手国は商品交易条件の不利化と貿易から得られる利潤の減少に伴って輸出をへらす。ために課税国消費者の損失は関税収入を支出して得られるウェルフェアを超えるであろう。つまり不変生産費ケースにおいて、関税賦課はその国のウェルフェアを低めるといふことになる。

第二に逓増生産費ケースにおいては、承認されている最適関税論の結論をくつがえすことにはならなければならない。課税による国際分業の縮小、生産能力の損失を考慮にいれると、課税国ウェルフェアの増加は論者が示しているものよりかなり小さいものになる。

第三に逓増生産費の下でも、課税国と競争している第三国を入れた三国モデルで考えると、課税国ウェルフェアの増加はさらに一層小さいものになることがわかる。

最適関税論は貿易における一方国の独占あるいは不完全競争の問題に通ずる。またこの議論の前提として社会的（或は国民

的）無差別曲線が果して画あつても否やの問題が予め解決されねばならぬ。これらの問題はここでは割愛する。

P. A. Samuelson, *Foundations of Economic Analysis* (Cambridge, Mass. 1947), Chapter VIII.

C. F. Bickerike, "The Theory of Incipient Taxes," *Economic Journal*, December, 1906, pp. 529ff; and his review of A. C. Pigou's *Protective and Preferential Import Duties*, *Economic Journal*, March 1907, pp. 98ff.

F. V. Edgeworth, *Papers Relating to Political Economy*, Vol. II, pp. 340ff. (Reprinted from the 1908 *Economic Journal*.)

A. P. Lerner, *The Economics of Control* (New York, 1944), pp. 382—5.

N. Kaldor, "A Note on Tariffs and the Terms of Trade," *Economica*, November 1940.

T. de Soitowsky, "A Reconsideration of the Theory of Tariffs," *Review of Economic Studies*, IX (2), (1941—42), pp. 89—110.

(Reprinted in *Readings in the Theory of International Trade*, Philadelphia, 1949.)

Joan Robinson, "The Pure Theory of International Trade," *Review of Economic Studies*, XIV (2), (1946—47),

pp. 107—8.

R. F. Kahn, "Tariffs and the Terms of Trade," *Rev. of Ec. Studies*, XV (1), (1947—48),

I. M. D. Little, "Welfare and Tariffs," *R. of Ec. Studies*, XVI (2), 1948—49.

Ditto, *A Critique of Welfare Economics*, Oxford, 1950, Chap. XIII.

J. de V. Graaf, "On Optimum Tariff Structures," *R. of Ec. Studies*, Vol. XVII, 1949—50.

Harry G. Johnson "Optimum Welfare and Maximum Revenue Tariffs," *R. of Ec. Studies*, Vol XIX (1), 1950—51.

G. D. A. MacDougall, "The Use of Home Resources to Save Imports: A Comment," *Ec. Journal*, Sept. 1950.

J. J. Polak, "The Optimum Tariffs and the Cost of Exports," *R. of Ec. Studies*, 1950—51.

F. C. Child, "The Gains from Limited Trade," *R. of Ec. Studies*, 1950—51.

六、生産要素価格均等化論或は貿易の

国内所得分配に及ぼす効果

国際貿易理論は、生産要素の国際的不移動の前提の下で、貿易される商品の価格が国際的に均一になることを証明してき

た。だがヘクシャーの先駆的論文からオリーン、ストルバーとサムエルソンなどの論及を経て、貿易を通じて、生産要素が国際的に不移動であっても、国内で生産要素の比例性が変り、その比例性が国際的に均一化するので、生産要素の価格も国際的に均一化するであろう。完全には均一化しないという反対論もあるが、完全に均一化するという決定版をここでもサムエルソンが *Review of Economic Studies*, 1953—54 に発表するに至った。

生産要素価格が国際的に完全に均等化するや否やという問題の進め方よりも、もともとヘクシャーが提起した問題、つまり自由貿易によって特定階級（たとえば労働者）の所得分配がどれだけ高まり、従って国民経済全体としても好ましい所得増加と所得分配をもたらすかどうか、それよりも保護による工業化の方が一層好ましい効果をもたらすかどうか、という問題検討の方が一層興味あり重要であるようにわたくしには思われる。こういう方向への展開は、メツッラーやその弟子クローの労作において見出される。

さらに注意しなければならぬことは、生産能率の完全に均等な各国の生産要素を見出しそれを前提としてのみ、生産要素価格の国際的均一化は証明しうるのである。だが一体物理的に生産能率の完全に等しい生産要素などというものが見出されるであろうか。異なる国民経済という枠の中にある生産要素は、社会的生産能率によって大きく規定される。従って生産要素価格の

国際的均一化論は理論的には興味ある問題ではあるが、これを實際問題に解釈し直すときには十分の注意が必要である。生産率の異なる国民間に所得水準差が発生することを決して否定することはならないのである。

右と関連して興味あることは、レオンチェフがアメリカ経済のインプット・アウトプット分析の副産物として發表した論文である。そこでは彼は、一般見通の見解と反対に、アメリカは労働集約的な商品を輸出し、資本集約的な商品を輸入してゐるという結果を得てゐる。これに対してホルスワースやスワレーンの批判が發表されてゐるが、たまたまサムエルソンがプリンストン大学に来てこの問題を論じ、アメリカ人はほかの国民にくらび、三つの鼻をうつつで、つまり生産率が三倍であるから、これを考慮に入れば、アメリカはやはり資本集約的な商品を輸出し、労働集約的な商品を輸入してゐることになると指摘したのである。

(c) 生産要素価格均等化論

E. Heckscher, "The Effect of Foreign Trade on the Distribution of Income," *Economist Yearly*, 1919, translated into English in *Readings*.

Bertil Ohlin, *Interregional and International Trade*, 1933.

W. F. Stolper and P. A. Samuelson, "Protection and Real Wages," *R. of Ec. Studies*, Nov. 1941, reprinted in

Readings.

John M. Cassels, "On the Law of Variable Proportions," *Explorations in Economics*, 1936, reprinted in *Readings in the Theory of Income Distribution*, 1946.

P. A. Samuelson, "International Trade and the Equalization of Factor Prices," *E. J.*, June 1948.

Ditto, "International Factor-Price Equalisation Once Again," *E. J.*, June 1949.

Ditto, "Prices of Factors and Goods in General Equilibrium," *R. of Ec. Studies*, 1953—54.

J. Tinbergen, "The Equalization of Factor Prices between Free Trade Areas," *Metroeconomica*, July 1949.

J. E. Meade, "The Equalization of Factor Prices: The Two-Country Two-Factor Three-Product Case," *Metroeconomica*, Dec. 1950.

S. F. James and I. F. Pearce, "The Factor Price Equalisation Myth," and P. A. Samuelson, "A Comment on Factor Price Equalisation," *R. of Ec. Studies*, 1951—52.

A. P. Lerner, "Factor Prices and International Trade," *Economica*, Feb. 1952, reprinted in *Essays in Economic Analysis*, 1953.

I. F. Pearce, "A Note on Mr. Lerner's Paper," *Economica*, Feb. 1952.

W. W. Leontief, *The Structure of American Economy*, 1919—

1939, Oxford Univ. Press, 1951, Part IV, B.

7. ドル不足問題—スターリング地域、E・

P・U・とユニー・プロテクションイズム

高度に抽象的な国際貿易理論の諸問題から少しく国際経済の現実問題に眼を転ずるに、一九五〇年頃から最近までの期間において論壇をにぎわしたものは何といつても米国外の自由世界諸国のドル不足をめぐって、その原因究明と対策についてであった。殊にスターリング地域とE・P・U・諸国の現実認識に関する論争は膨大な数にのぼり、真鍮をきかしたものであるといふべき。

ドル不足の原因が戦争直後のように、ハント・アップ需要と生産設備回復のための投資という過大有効需要に基づくものであるという認識の段階は既にすぎ去り、今やもっと根本的不均衡が伏在している。二十世紀の世紀的、慢性的ドル不足をもたっているのではないかの究明に到達している。それはアメリカの比類なき天然資源、技術進歩、大規模生産と大きな市場、隔絶して高い生産能力、またその急速な改善率など、いずれも生産条件における構造的・世紀的不均衡を指摘するに至っている。

このような認識あるいは英・欧の何らかの inferiority complex に基いて、いまや大なり小なり一種の対米ユニー・プロテ

Spvend Laursen, "Production Functions and the Theory of International Trade," *American Ec. Review*, Sept. 1952.
E. Victor Morgan and G. L. Rees, "Non-Trade Goods and International Factor Price Equalisation," *Economica*, Nov. 1954.

(c) マンハト

Lloyd A. Metzler, "Tariffs, the Terms of Trade and Distribution of National Income," *J. P. E.*, Feb. 1949.

Ditto, "Tariffs, International Demand, and Domestic Prices," *J. P. E.*, Aug. 1949.

Anthony V. C. Koo, "Duty and Non-duty Imports and Income Distribution," *American Ec. Review*, March 1953.

(c) マンハト

Wassily W. Leontief, "Domestic Production and Foreign Trade, The American Capital Position Re-examined,"

Proceedings of the American Philosophical Society, Sept. 28, 1953, also *Economia Internationale*, Feb. 1954.

P. T. Ellsworth, "The Structure of American Foreign Trade: A New View Examined," *Review of Economics and Statistics*, Aug. 1954.

Boris C. Swerling, "Capital Shortage and Labor Surplus in the United States?" *Rev. of Economics and Statistics*, Aug. 1954.

タシニリキイバ難題ニツケルハヤクニハ照スルベク。マロハム
(Thomas Balogh) ニヤルヤルノ著述ヲハルベク。ヤクトリヤル
スターコンタニ製鉄ニヤル。A. D. N. ノ著書并難ニヤル。ヤクト
リハルヤクニハ照スルベク。

- Thomas Balogh, *Dollar Crisis; Causes & Cure*, Oxford 1950.
R. G. Hawtrey, *The Balance of Payments and the Standard of Living*, London, 1950.
Charles P. Kindleberger, *The Dollar Shortage*, Chapman & Hall, London, 1950.
The Oxford University Institute of Statistics, *The Economics of Full Employment*, Oxford, 1947.
G. D. N. Worswick and P. H. Day ed., *The British Economy*, 1945—1950, Oxford, 1952.
Roy F. Harrod, *The Pound Sterling*, Essays in International Finance, No. 13, Feb. 1952, International Finance Section, Dept. of Economics and Social Institutions, Princeton Univ. Ditto, *The Dollar*, Macmillan, 1953.
D. H. Robertson, *Britain in the World Economy*, George Allen and Unwin, 1954.
R. G. Hawtrey, *Towards the Rescue of Sterling*, Longmans, 1954.
Robert Marjolin, *Europe and the United States in the World*

Economy, Duke Univ. Press, 1953.

Sir Douglas Copland, *Problems of the Sterling Area with Special Reference to Australia*, Essays in International Finance, Priton Univ., No. 17, Sept. 1953.

F. V. Meyer, *Great Britain, the Sterling Area and Europe*, Bowes & Bowes, Cambridge, 1952.

A. R. Conan, *The Sterling Area*, Macmillan, 1952.

A. C. L. Day, *The Future of Sterling*, Oxford, 1954.

J. E. Meade, *Problems of Economic Union*, Univ. of Chicago Press, 1953

Werner Schlotte, *British Overseas Trade, from 1700 to the 1930's*, translated by W. H. Chaloner and W. O. Henderson, Oxford, 1952.

E. C. A., *The Sterling Area, An American Analysis*, 1952.

B. Tew, *International Monetary Co-operation, 1945—1952*, 1952.

Per Jacobsson, *The Sterling Area*, Bank for International Settlements, Basle, 1953.

Lionel Robbins, "The Balance of Payments," *The Slump Memorial Lecture* delivered before the Univ. of London on 20 Nov. 1951.

J. E. Meade, "Breton Woods, G. A. T. T., and the Balance of Payments," *The Three Bumps*, No. 16, Dec. 1952.

- Colin Clark, "The Have and the Have-Not Countries," *Eleventh Montague Burton Lecture on International Relations*, Univ. of Leeds, 1953.
- D. H. Robertson, *Utility and All That, and other essays*, George Allen & Unwin, 1952, Part III.
- Gunnar Myrdal, "Toward A More Closely Integrated Free-World Economy," *Columbia University Bicentennial Conference*.
- F. W. Paish, *The Post-War Financial Problem and other Essays*, Macmillan, 1950.
- The Institute of Bankers, *Banking and Foreign Trade*, Europa Publications Ltd., 1952.
1. A. J. Brown, The present-day pattern of world trade.
 2. R. F. Kahn, International regulation of trade and exchanges.
 3. Per Jacobsson, Trade and financial relationships between countries—the progress towards multilateralism.
 4. W. B. Reddaway, Governmental intervention and influence in foreign trade.
- G. D. A. MacDougall, "British and American Exports: A Study Suggested by the Theory of Comparative Costs," *E. J.*, Dec. 1951 and Sept. 1952.
- Ditto, "Britain's Bargaining Power," *E. J.*, March 1946.
- Sir Donald MacDougall and R. Hutt, "Imperial Preference: A Quantitative Analysis," *E. J.*, June 1954.
- C. P. Kindleberger, "The Position and Prospects of Sterling," *J. P. E.*, Feb. 1955.
- K. M. Wright, "Dollar Pooling in the Sterling Area, 1939—52," *A. E. R.*, Sept. 1954.
- United Nations, Dept. of Economic Affairs, *Economic Survey of Europe Since the War*, A Reappraisal of Problems and Prospects, Geneva, 1953. Sales No. 1953. II. E. 4.
- Organisation for European Economic Co-operation, *Europe the Way Ahead*, Toward Economic Expansion and Dollar Balance, Paris, Dec. 1952.
- G. A. T. T.'s report on *International Trade*, Geneva.
- C. P. Kindleberger, "German Terms of Trade by Commodity Classes and Areas," *Review of Ec. and Statistics*, May 1954.
- W. Diebold, Jr., *Trade and Payments in Western Europe*, Harper 1952.

ハドル不足問題—アメリカの対外経済政策
 ドル不足の原因の一半はアメリカの対外経済政策にありとし

て、その高関税とか国内産業保護的によく変り易い対外経済政策とか、複雑な通関手続とかが欧・英から批難的となつてゐる。だが米国政府自体はそういう問題をまじめに研討しようとする努力していることは認めていふと思われる。ランデル報告や関税委員会の慎重な活動がこれを裏書きしている。関税の根本的改正など行いたいが、とても大仕事でなかなかできなかつたのが本當のところであらう。

しかしアメリカの対外経済政策がアメリカの利害、殊にセキユリテイ確保の立場から大きく戦略的考慮に支配されてゐることはいふに難い。それは外部から眺めてゐる時よりもワシントンにおいて痛感する。ヘイリー報告はそのなまじりした表明である。そしてヴァイナー教授が、比較生産費のついで貿易をせよと云ふ純経済的利害と国防的安全と云ふ如き非経済的利害とをいかに合理的に配慮するか、その理論的説明が必要であると更めて指摘してゐることは注目されてゐるであらう。

S. E. Harris ed., *Foreign Economic Policy for the United States*, N. Y., 1944.

Economic Report of the President, Transmitted to the Congress.

U. S. Dept. of Commerce, *The United States in the World Economy*, Economic Series No. 23, Washington 1943.

Ditto, *International Transactions of the United States during*

the War, Economic Series No. 65, Washington 1948.

Report to the President on Foreign Economic Policies, Washington Nov. 10, 1950.

Commission on Foreign Economic Policy, *Report to the President and the Congress*, Jan. 1954.

Ditto, *Minority Report*, Jan. 1954.

Staff Papers, presented to the Commission on Foreign Economic Policy, Feb. 1954.

Klaus Knorr and Gardner Patterson prepared, *A Critique of the Randall Commission Report*, International Finance Section, Princeton, 1954.

Resources for Freedom, A Report (Paley Report) to the President by the President's Materials Policy Commission, 1952.

Annual Report of the United States Tariff Commission.

A Trade and Tariff Policy in the National Interest, A Report to the President by the Public Advisory Board for Mutual Security, Washington Feb. 1953.

Howard S. Piquet, *Aid, Trade and the Tariff*, including a Handbook of major dutiable United States imports, Thomas Y. Crowell Co, N. Y., 1953.

D. Gale Johnson, "Agricultural Price Policy and International Trade," *Essays in International Finance*, Princeton,

No. 19, June 1954.

"Problems of Trade Equilibrium," *Federal Reserve Bulletin*, Oct. 1952.

"United States Balance of Payments in 1952-53," *Federal Reserve Bulletin*, Oct. 1953.

Jacob Viner, "The Role of the United States in the World Economy," *Columbia Univ. Bicentennial Conference*.

R. Nurkse, "The Problem of International Investment Today in the Light of Nineteenth-Century Experience," *E. J.*, Dec. 1954.

Ernest Block, "United States Foreign Investment and Dollar Shortage," *Review of Ec. and Statistics*, May 1953.

E. J. Mishan, "Can the United States Contribute Further toward International Solvency?," *Review of Ec. and Statistics*, Nov. 1954.

W. Adams Brown Jr. and Redvers Opie, *American Foreign Assistance*, Brookings Institution, 1954.

九、ドル不足問題—輸入需要

弾力性バシシムス

とくに一九五〇年頃までのドル不足論争の一つの基本テーゼは、マクループがいみじくも名づけたように、輸入需要弾力性が小さいといふバシシムスであった。弾力性の測定はその方法

論においても実証においても宏汎な進歩をみせた。方法論に関する最もすぐれた検討の一つはオルカットのであり、ハアバーガーが従来最小自乗法を排斥して、需要曲線シフトを考慮した幅のある純価格弾力性を求める新方法を発表しているのが注目される。

実証のうち最もすぐれたものの一つは、アドラー其他によるニール・ヨーク連邦準備銀行の労作であろう。数多くの結果を通算して感じられることは、なるべく同質的な地域と商品群を選ばざるに、弾力性価値も相関係数も高くなるということである。このことをもっとおし進めれば各相手国毎に各商品毎に検討したならば最も信服しうる結果が得られるという結論に来るかも知れない。事実米商務省の担当官はそういういわばブリッティッシュな方法より他に今のところ信頼すべきものがないと語っていた。

イギリスのドル不足問題やポンドの自由兌換問題などが、ハロッド・ミーンなどの学者によって論ぜられ、*Lloyds Bank Review*, *Three Banks* など日本では余り知られていない業界誌に発表されることに注意をおこたってはならない。

ほかに適当な分類個所もないまま、戦前戦後の私的資本移動並に政府エイドに関する実証研究の文献をここに一緒にかけおいた。

(a) 輸入需要弾力性の方法

D. J. Morgan and W. J. Corlett, "The Influence of Price

- in International Trade. A Study in Method, *Journal of the Royal Statistical Society*, Part III, 1951.
- Guy H. Orcutt, "Measurement of Price Elasticities in International Trade," *Review of Economics and Statistics*, May 1950.
- J. Tinbergen, "Some Measurements of Elasticities of Substitution," *R. of Ec. and Statistics*, Aug. 1946.
- J. J. Polak, "Note on the Measurement of Elasticity of Substitution in International Trade," *R. of Ec. and Statistics*, Feb. 1950.
- G. D. A. MacDougall, "British and American Exports," *E. J.* Dec. 1951 and Sept. 1952.
- Arnold C. Harberger, "A Structural Approach to the Problem of Import Demand," *A. E. R.*, May 1953.
- Fritz Machlup, "Elasticity Pessimism in International Trade," *Economia Internazionale*, Feb. 1950.
- (a) 輸入需要弾力性の測定
 (b) インベリヤ輸入需要の分析
- J. J. Polak, *An International Economic System*, Univ. of Chicago Press, 1953.
- Hans Neisser and Franco Modigliani, *National Incomes and International Trade, A Quantitative Analysis*, Univ. of Illinois Press, 1953.
- Tse Chun Chang, *Cyclical Movements in the Balance of Payments*, Cambridge, 1951.
- John H. Adler, Eugene R. Schlesinger and Evelyn van Westerborg, *The Pattern of United States Import Trade since 1923, Some New Index Series and their Application*, Federal Reserve Bank of New York, May 1952.
- Milton Gilbert and Irving B. Kravis, *An International Comparison of National Products and the Purchasing Power of Currencies*, O. E. E. C., Paris, 1954.
- R. G. D. Allen and J. Edward Ely ed., *International Trade Statistics*, John Wiley, New York, 1953.
- Vernon W. Malach, *International Cycles and Canada's Balance of Payments*, 1921-33, Univ. of Toronto Press, 1954
- Edward Marcus, *Canada and the International Business Cycle, 1927-1939*, Bookman Associates, 1954.
- Randall Hinshaw, "Effect of Income Changes on American Imports of Goods and Services," *Federal Reserve Board*, March 1946.
- Ditto, "On the Elasticity of Import Demand Schedules," *Federal Reserve Board*, Aug. 26, 1946.
- Ditto, "American Prosperity and the British Balance of Payments Problem," *Review of Ec. and Statistics*, Feb. 1945.
- Randall Hinshaw and Lloyd A. Metzler, "World Pros-

- erity and the British Balance of Payments," *Review of Ec. and Statistics*, Nov. 1945.
- Arnold C. Harberger and M. J. Verhulst, "Change in Trade Patterns Since the Devaluations," *I. M. F. Research Dept.*, Aug. 23, 1950.
- J. H. Adler, "The Postwar Demand for United States Exports," *Review of Ec. and Statistics*, 1946.
- Barend A. de Vries, "Immediate Effects of Devaluation on Prices of Raw Materials," *I. M. F. Staff Papers*, Sept. 1950.
- J. J. Polak and T. C. Chang, "Effect of Exchange Depreciation on A Country's Export Price Level," *I. M. F. Staff Papers*, Feb. 1950.
- Barend A. de Vries, "Price Elasticities of Demand for Individual Commodities Imported into the United States," *I. M. F. Staff Papers*, April 1951.
- J. J. Polak, "Contribution of the September 1949 Devaluations to the Solution of Europe's Dollar Problem," *I. M. F. Staff Papers*, Sept. 1951.
- Sidney S. Alexander, "Effects of a Devaluation on a Trade Balance," *I. M. F. Staff Papers*, April 1952.
- W. R. Gardner and S. C. Tsiang, "Competitive Depreciation," *I. M. F. Staff Papers*, Nov. 1952.
- G. Lovasz and H. K. Zassenhaus, "Short-run Fluctuations in U. S. Imports of Raw Materials, 1928-39 and 1947-52," *I. M. F. Staff Papers*, Oct. 1953.
- Eugene R. Schlesinger, "The Long-run Outlook for U. S. Merchandise Imports," *I. M. F. Staff Papers*, Feb. 1954.
- Ta-Chung Liu, "The Elasticity of U. S. Import Demand: A Theoretical and Empirical Reappraisal," *I. M. F. Staff Papers*, Feb. 1954.
- Timothy D. Sweeney, "Short-Range Forecasting of U. S. Imports," *I. M. F. Staff Papers*, Sept. 1954.
- Hans P. Neisser, "The United States Demand for Imports," *A. E. R.*, May 1953.
- A. J. Brown, "Some Aspects of International Trade Changes since Devaluation," *Yorshire Bulletin of Economics and Social Research*, July 1951.
- J. J. Polak and Ta-Chung Lie, "Stability of the Exchange Rate Mechanism in a Multi-Country System," *Econometrica*, July 1954.
- W. I. Smith, "Exchange Rate Adjustments and Living Standards," *A. E. R.*, Dec. 1954.
- (c) Convertibility
- "The Adequacy of Monetary Reserves," *I. M. F. Staff Papers*, Oct. 1953.

Ragnar Nurkse, "The Problem of Currency Convertibility Today," An address before the Academy of Political Science on April 29, 1953, *International Economic Outlook*, Vol. XXV No. 3.

Lionel Robbins, "The International Economic Problem," *Lloyds Bank Review*, Jan. 1953.

A. C. L. Day, "What Kind of Convertibility?", *Lloyds Bank Review*, April 1953.

Lloyd A. Metzler, Robert Triffin and Gottfried Haberler, *International Monetary Policies*, Federal Reserve Bank, Postwar Economic Studies, No. 7, Sept. 1947.

Raymond F. Mikesell, *Foreign Exchange in the Postwar World*, the Twentieth Century Fund, 1954.

Ditto, "The Emerging Pattern of International Payments," *Essays in International Finance*, Princeton No. 18, April 1954.

Ragnar Nurkse, *International Currency Experience—Lessons of the Inter-War Period*, League of Nations, 1944.

Money, Trade, and Economic Growth, in Honor of John Henry Williams, Macmillan, 1951, xxxx Section 1.

Milton Friedman, "The Case for Flexible Exchange Rates," *Essays in Positive Economics*, Univ. of Chicago Press, 1953.

International Monetary Fund, *Annual Report on Exchange Restrictions*.

J. R. Sargent, "Convertibility," *Oxford Economic Papers*, Feb. 1954.

A. C. L. Day, "Relative Prices, Expenditure and the Trade Balance," *Economica*, Feb. 1954.

Ditto, "Devaluation and the Balance of Payments," *Economica*, Nov. 1950

(七) 紙幣論

Arthur I. Bloomfield, *Capital Imports and the American Balance of Payments*, 1934-39, Univ. of Chicago Press, 1950.

Ditto, "Speculative and Flight Movements of Capital in Postwar International Finance," *Princeton Studies in International Finance*, No. 3.

United Nations, Dept. of Economic Affairs, *International Capital Movements during the Inter-War Period*, Sales No. 1949. II. D. 2.

Ditto, *The International Flow of Private Capital 1946-1952*, Sales No. 1954. II. D. 1.

U. S. Dept. of Commerce, Office of Business Economics, *Foreign Investments of the United States*, A Supplement to the Survey of Current Business, U. S. Government Printing Office, Washington 1953.

Ditto, *Foreign Aid by the United States Government 1940-1951*, Washington, 1952.

U. S. Dept. of Commerce, Office of International Trade, *Factory Limiting U. S. Investment Abroad*, Part I, Washington, 1954.

“International Gold and Dollar Movements,” *Federal Reserve Bulletin*, March 1954.

Mervyn L. Weiner and Romeo Della-Chiesa, “International Movements of Public Long-Term Capital and Grants, 1946-50,” *J. M. F. Staff Papers*, Sept. 1954.

10. ドル不足問題——経済成長理論

ドル不足問題の理論的究明は漸く経済成長理論と結びついて新しい展開に達しようとしている。ロマンズの *Mangrual Lecture* が与えた理論的分析を提示し、シモンソンが補いつづける。ヒックスはアメリカとイギリスとの二国モデルによって、アメリカの一律の生産改善及び偏輸出生産改善は、イギリスの国際収支困難すなわちドル不足を招来するものではないが、二十世紀に入ってからアメリカの工業化即ち偏輸入生産改善が今世紀の慢性的なドル不足の原因であると論断するのである。わたくしは、アメリカ、対米競争国、それらの相手国という三国モデルにすることによって、ヒックスの結論がかなり修正を必要とし、かつヒックスよりもはるかに興味ある展開が

(1) である。

ドル不足問題とはなれて、経済成長理論自体も新しい展開に進み入っているようである。一つの方向は、ハロッド、ドナーの動態モデルを外国貿易と資本移動を含む二国間経済に拡張したシモンソンのすぐれた貢献である。他の方向はラムゼイなどの貯蓄と資本の理論を一層発展させた、ノローとサメルソンによる共同労作である。いずれもまたこれから大いに改善を加えられようとの希望があるが、待望の動態的国際経済理論が着々建設されつつあるかに思われる。

(1) 小島清稿、「経済成長とドル不足」、日本経済新聞、やましの経済学、一九五五年三月二十二—二十七日、参照。

Edward Ames and Allen R. Ferguson, “Technological Change and the Equilibrium Level of the National Income,” *Q. J. E.*, May 1948.

Gerald M. Meier, “A Note on the Theory of Comparative Costs, and Long Period Developments,” *Economic Internationalist*, Aug. 1952.

C. R. Whitlesey, “Foreign Investment and the Terms of Trade,” *Q. J. E.*, 1932.

J. R. Hicks, “An Inaugural Lecture,” *Oxford Economic Papers*, June 1953.

- P. T. Ellsworth, *The International Economy, its structure and operation*, Macmillan, 1950.
- Donald B. Marsh, *World Trade and Investment, the economics of interdependence*, Harcourt, 1951.
- Stephen Enke and Virgil Salera, *International Economics*, Prentice-Hall, 1947.
- Charles P. Kindleberger, *International Economics*, Richard D. Irwin, 1953.
- Delbert A. Snider, *Introduction to International Economics*, Richard D. Irwin, 1954.
- William Ashworth, *A Short History of the International Economy, 1850-1950*, Longmans, 1952.

むすび

以上いくつかの項目にわかつて概観した最近の英米国際経済学は、大なり小なり、需要分析から生産分析へ、部分均衡論から一般均衡論へ、静態論から発展理論の動態論へと、前進していると要約していいであろう。こういう目標はもととスミスやリカードが、精緻には展開しえなかったにしても、懐いていた長期理論の性格であった。けれどもJ・S・ミルの静態的・需要論的国際価値論に自らを局限してきた古典的貿易理論の主流にとっては、かなり限本的な反省が必要ではないか

と思われる。わたくし自身の研究課題はこういう国際貿易理論における二体系——生産費説と需要説——の性格を先ずもって明確にし、正しい生産費説に立脚して国際経済の発展理論的動態論を展開することにある。こういう理論こそ我國のことき後進国或は中進国の最も必要とするものである。これに対して我國で深く研究され支持されている構造理論がいかなる成果を生み、貢献するであろうか、世界の学会も興味をもって注目しているところであろう。

(本稿は国際経済学会関東部会、一九五五・二・二六に報告したものである。一九五五・四・一〇)